

転倒予防最前線

「こ」：厚生省（現・厚生労働省）長寿科学総合研究事業の研究班（班長：杉岡洋一 九州大学整形外科学教授[当時]）の一員として行った島根県と長野県での運動器疾患に関する疫学調査の成果の一つとして、「転倒は生活習慣病の一つ」という見解が示され、それを根拠として、わが国初の「転倒予防教室」を東京厚生年金病院（現・JCHO 東京新宿メディカルセンター）内に立ち上げた（1997 年）。その活動実績を基盤に、転倒予防医学研究会が設立され（2004 年）、次いで日本転倒予防学会に進化・発展し（2014 年）、無事 20 周年を迎えることができた（2024 年）。

「ろ」：論理と実践を主体として、転倒予防の事業や活動は、多職種連携を芯として、地域社会・病院・介護施設・労働現場等で展開され、それと共に学術研究も多様な視点と分野・領域で広がってきた。

「ば」：場面ごとの転倒とそれに伴う四肢の骨折や頭部外傷、あるいは認知症者や神経疾患・運動器疾患等の転倒の事例を収集して整理し、地道に精査・分析を継続して、その発生要因を探求する営みが大切である。

「な」：内的要因と外的要因、そして行動要因の 3 つの発生要因が、その場面・その人の特性と絡め複合して、一つひとつの転倒事象が起こればと考えられる。したがって、転倒予防の活動には、それぞれの発生要因や場面・人の特性に関わる多様な専門家の知識と経験の融合が必須であり、そこから新たな予防策が創発されると確信している。

「い」：医師、看護師、理学療法士、作業療法士、薬剤師、身体運動科学・工学研究者、法律家・弁護士、建築士、運動指導者等、様々な職種の連携・協力により、新たな視点が生まれたり、新規のシステムや構造の創出が期待できる。

本特集では、こうした歴史と経緯と理念を元に、日本転倒予防学会の多彩な分野の構成員の専門家の代表が、それぞれの専門性を活かして、10 本の論文として、転倒予防に関わる最前線の取り組みや知見・情報を分かりやすくまとめた。本学会が編纂した『転倒予防白書 2023』（日本医事新報社）も併せて参照いただいて、我が国の転倒予防の学術研究と実践活動が一層発展することを希望している。そして、この特集が、本誌の読者の日常の臨床活動や各地域での転倒予防の普及・啓発活動にいささかでもお役に立てば幸いである。

（武藤芳照）